



ボッティチェリとルネサンス

フィレンツェの富と美

Bunkamura ザ・ミュージアム 2015年3月21日～6月28日 (4/26記)



- サンドロ・ボッティチェリ(Sandro Botticelli 1455～1510)は、師匠のフィリッポ・リッピとコジモ・デ・メディチが懇意だったことから、メディチ家のプラトン・アカデミーとの交流ができた。コジモの孫であるロレンツォとボッティチェリは共に陽気で悪戯好きだったことから意気投合した。

*コジモはラテン語が堪能で図書館まで作ったが、哲学者プラトンが好きだったので、プラトン・アカデミーという名を冠してあらゆる分野の芸術家を集めて庇護した。



マリヌス・ファン・レイメルスヴァーレに基づく模写《高利貸し》

当時は利息を取って金を貸すことは法律違反だった。そのためメディチ家の銀行は為替手形という方法で、国外へ商取引に行く人々から換金レートを得た。左はおそらく法律違反を犯している高利貸し。

それとは対照的に、右は自分が産んだ子でありながら、神の御子であるイエス・キリストへの敬意と、その受難の人生に対する悲しみを表す聖母マリア。ボッティチェリはこの円形(トンド tondo)の画をよく描いた。

本展では、師匠リッピの聖母子像と弟子ボッティチェリのいくつかの聖母子像が観られ、どのように学んでいったかが解る。



《聖母子と洗礼者聖ヨハネ》



《ヴィーナスの誕生》

母なる大地ガイアは天空神ウラノスと結婚して多くの子供を授かったが、ウラノスは気に入らない子を殺してしまうので、怒ったガイアが息子にウラノスを殺させ、その生殖器を切り取って海に流したところ、それが泡になり、その泡から生まれたのがヴィーナスであるという。そのためヴィーナスは美と愛欲の女神と云われているようだ。西風ゼピュロスは春と豊穰を、ニューペ(精霊)クロリス(ラテン語でフローラ)は春と恋を呼ぶ。



《プリマヴェーラ》

三美神、クロリス(フローラ)の間に立つヴィーナスはどこか物憂げ。

それまでの宗教画では、神々は人間と別格の崇高な姿でなければならなかったが、ボッティチェリは内面までも描き出そうとしたので、表情が人間的描写になっている。西風ゼピュロスによってクロリスが変身し、花を蒔く。左端にいるヘルメス(メルクリウス)は旅人・商売の神なので、子孫繁栄と事業繁栄という見方もできる。



ロレンツォはハインリッヒ・イザークの歌曲が好きだった。「三声と四声のための歌曲集」(本展展示)にはイザークの曲が22曲収められた。

左のCD(HEINRICH ISAAC—ICH MUSS DICH LASSEN)RIC318には、40代の若さで亡くなったロレンツォの死を悼んだ曲が収録されている。詩を書いたのはポリツィアーノ(Angelo Poliziano)という詩人で、プラトン・アカデミーのひとり。ロレンツォが亡くなり、メディチ家が破綻してフィレンツェから追放されると、ボッティチェリは、官能と贅沢を廃するドメニコ会のサヴォナローラに傾倒する。画風は優美さからごこちない硬さへ変貌する。そのためか晩年には画の注文がほとんどなかったという。